

説得

千葉 覚

自分の考えをよく理解してもらいたい、自分の思っている通り行動してもらいたいと願う時、その説得の方法はさまざまであるが、誰でも多少は苦勞するであろう。話し方にせよ書き方にせよ、苦もなく即座に説得できる技術を備えている人は実に羨ましい。それに関して二三文章をあげてみたい。

まず『源氏物語』から二つ。「乙女」の巻にある一節で誰でもすぐ頭に浮かぶ所である。源氏が我が子夕霧の教育方針について、その厳しさゆえに不満に思う夕霧の母方の祖母、大宮に説明する所である。わざわざ大学で学ばなくても官途につける夕霧を大学に入れて学問させる。その理由として

猶才を本として大和魂の世に用ひらるる方も強う侍らぬ

と漢学を基にして、わが国の実情にあう政治的判断ができる人間になってほしいというわけだがこれだけではない。

身づからは九重の内に生ひ出で侍りて世の中の有様も知り侍らず、御前にさぶらひて、わずかになんはかなき文なども習ひ侍りし。ただかしこき御手より伝え侍りしだに何事も広き心知らぬほどには、たのまひ文才をまぬぶにも琴笛の調べにも功足らず及ばぬところ多くなん侍りける

父桐壺院の直接指導でも学問の基礎ができていないのでその効果がなかったと源氏自身の体験から学問の大切さを説く。万能な源氏が自らの体験を基にしての説得は力強い。他に誰にも軽蔑されない見識を持つ必要があること、愚かな親から子、孫と離れていくにつ

れて、その将来が不安であることなどをあげて説得するのであるが、やはり肝腎なのは源氏自身の体験談と思われる。何においても一流の技術なり知識なりを備えている人間が自己の体験を基にしての説得なのでその力は増すことになる。

次に「落標」の巻である。ある意味では大変興味のある個所で、これも有名な一節である。源氏が須磨に身を避けていた時に結ばれた明石の上に、女の子が生まれ、それを紫の上に打ちあける場面である。

さこそあなれ（姫君が生まれたこと）あやしうねぢけたるわざなりや。さもおはせなむと思ふあたりには心もとなくて、思ひの外に口惜しうなむ。女にてさへあなれば、いとこそものしけれ。尋ね知ら

でもありぬべきことなれど、さは思ひ棄
つまじきわざなりけり。呼びにやりて見
せ奉らむ。憎み給ふなよ

今でもありそな話で、慣習の違いから簡
単に現代人にてはめるわけにはいかないが
苦渋に満ちた告白であることには昔も今もか
わりがないはずだ。またこれは説得より弁解
か弁明、申し聞きと言った類かもしれないが、
紫の上に姫君の存在を納得してもらおうとい
うことで一種の説得と言えないことはない。

まず「あやしうねぢけたるわざ」と世の中
の不条理を言つて責任の所在をぼかし「心も
となし」と言つて紫の上の弱点をつく。なか
な子供のできない紫の上の弱みをさらりと
言う。相手に引け目を感じさせ自分を有利に
もつていこうとする手である。公平にみてち
よつと狡い手である。でもこれが紫の上に衝
撃を与える。それから生まれたのが女の子で
あったのがつまらないと言う。つまり身分の
低い明石の上に生まれた子では入内もままた
らぬということで間接的に紫の上の優位性を
示し紫の上の優越感をくすぐる。このように
して源氏はその場をうまく逃れる。紫の上は
決して納得したわけではないが嫉妬心をやわ
らげようとするので源氏のこの方法が功を奏

したことになる。なるほどこんなふうにして
難を逃れるのかとなかなか興味ある所だが、
決して私個人悪用するつもりはない。こんな
深刻な状況にはとても耐え切れないし、小心
者の私には縁のない話である。

最後に一つ。これは私個人全く納得いかな
いものである。いわゆる学校五日制に関する
論議で、その推進役である文部省の政府広報
(九月九日新聞掲載)の一部分を掲げてみる。

親子のふれあい、自然とのふれあい、社
会とのふれあい。いろいろなふれあいの
子供の豊かな個性、創造力を育みます。

不思議、驚き、感動―、暮らしの中から
学ぶことがいっぱいあります。学校週5
日制は、こうした体験の契機となり、子

供たちの豊かな個性、創造性を培う
(略) そのためには家庭、地域社会、学
校が一体となって、子供たちに自由な時

間を確保する(略) 大人にとつても、子
供たちといっしょに(略) 子供たちとふ
れあう有意義な時間をお過ごしください

納得いかないと言つたのはまず実体験から
の報告が全くないことである。実験校もある
と聞くが「こうした体験の契機」となってい
るかどうか具体的事実が示されてはいない。

教育には学校、家庭、社会にそれぞれの役割
があつて、以前からそれを前提に組織があり
それぞれ活動し、家庭においても家庭におけ
る役割を果たしてきているのであつて、改め
て学校五日制が「豊かな個性」「創造力」を
つくる方便とは言えないはずである。「子供
といっしょに」「子供たちとふれあう」と述
べるのはどうも家庭教育の不備をあげ、保護
者「親」の弱点をつこうと思つていらいが、
冗談ではない。家庭は家庭の役割りをその親
なりに果たそうと努力してゐるではないか。

土、日が休日でなくても頑張つてゐる親はた
くさんいる。教育の不備はそれぞれの集団
(家庭も含めて)の不備であつて、むしろ最
近は学校が問題になつていたのでないだろ
うか。さらに制度が始まつても行事制限、授
業時間の上乘せ等で「ゆとり」とは矛盾した
方向に進んでゐるではないか。要するに教師
の週休二日制を学校五日制などといつて視点
をはぐらかし、無意味にりつばなお題目をあ
げるだけの陳述から納得のいく話を取り出せ
というのは無理なことなのである。

週休二日制の弊害を最小限にする努力と論
議こそ必要なことと思われるが……。